



## 診療看護師(NP)としての経験と GIM-NPについて

JADECACOM アカデミー NP・NDC 研修センター 筑井菜々子

皆様、初めまして。地域医療振興協会 JADECACOM アカデミーのNP・NDC 研修センターの診療看護師(Nurse Practitioner: NP)の筑井菜々子です。今回は今までNPとして経験させていただいたこと、2021年から設立されたGIM-NP (General Internal Medicine-Nurse Practitioner) についてお話しさせていただきたいと思います。

私は2010年に東京医療保健大学の修士課程で2年間のNP教育を受けました。その後2年間は東京ベイ・浦安市川医療センター(以下、東京ベイ)で、日本で初めてのCritical領域でのNP教育を受けた1期生です。なんでもそうですが、初めてのことを作り出すことは想像を超えたいろいろな問題が生じるものです。大学院の面接で「日本には米国のようなNP制度はなく、一生懸命勉強しても働き方は何も変わらないかもしれない、それでもよいか?」と言われ、また「ないものを作り出すパイオニアとしての覚悟はあるのか?」と聞かれたことを今でも覚えています。当時は誰もNPの教育をどうやって行ったらよいか分かりませんでしたから、皆が手探りで行っていました。幸いにも米国のNPと一緒に働いた経験のある医師たちが東京ベイにいてくれたこともあり、導入は他の病院よりもスムーズにいったように思います。今、思い返すと何がなんだかよく分からない日本のNPという存在の私たちを、受け入れて育ててくれた東京ベイの皆様には感謝の言葉しかありません。新しいことにChallengeしてくださった勇氣に大変感謝し

ております。

その後、数年間の東京ベイの脳神経外科NPとして業務を経たのちに、その日はある日突然やってきました。上司から「筑井さんは、モンゴル人がゲルを転々として移動しながら働くように、色々な施設を転々として働くモンゴル人NPになりましょう。その方がありますよ」と言われ、よくわけも分からないまま、「はい」と元気よく返事をしたのが今から7年も前の話になります。それからは東京以外にも地域の病院や診療所で勤務し、その数は7年間で17カ所となりました。私が地域に出た目的は、一緒に働くことでNPという存在を1人でも多くの方に知っていただくこと、協会が育成している特定行為研修を学んでいる看護師さん(NDC研修生)の研修後に行われる実施研修のフォローを、働きながら一緒に行くことです。17カ所の施設の中で、協会以外の施設も3つ経験いたしました。北は北海道の最東端、南は離島の最西端と東と西は先っぽまで行き、その土地に住む方々と一緒に働き、数えきれないほどの沢山の出会いや経験をしました。極寒の寒さの北海道では牧草地をひたすらまっすぐ夜2時間走り続けて患者さんを搬送したり、ICUがない病院での重症管理や、へき地でのコロナ患者さんの対応も経験しました。南の島では自らダニの襲撃にあたり、あまりの暑さに毎日スクラブを着たまま海で泳ぐ術もマスターしました。地方での家族の在り方の違いも実感しました。生まれも育ちも就職先も全て東京の私にとっては、自分も周りも核家族が多かったのですが、地方では

患者さんは、誰かの誰かである、というつながり、スタッフの誰かの親戚、その子供、兄弟、友人といった感じで人と人とのつながりを強く感じます。誰かの大切な人が病気になって入院している、こんな当たり前のことを実感でき、目にすることができるのが地域医療の醍醐味の一つであると実感しております。一緒に働くNDC研修生と朝から晩まで共にどのようにしたら、患者さんや病院スタッフ、地域の方々にこの特定行為の制度を理解して受け入れてもらえるのか、考え走り回っていた日々は私の人生の中でとても大切な時間となりました。勝手ながらも一緒に制度を築きあげた研修生は戦友のような気持ちでいます。この年になっても全力で熱中できるものがある私は本当に幸せ者だと思っております。モンゴル人NP計画は間違いなく私のNP人生を豊かなものにしてくれました。人と一緒に自分が成長できるなんて一石二鳥どころかPricelessな経験です。このようなチャンスをごくださった協会と藤谷茂樹先生、山田隆司先生、この環境を受け入れてくれた全ての皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。

そして今、私たちは次の事業を始めています。2021年からはGIM-NPプログラムを立ち上げて、総合内科を専門とするNP育成を開始いたしました。私は今そのプログラムの一環として東京ベイ・浦安市川医療センターの総合内科に所属しております。総合内科を中心とし、ICU、救急外来、腎臓内科での透析管理や感染症科、超音波室などの臨床研修を大学院終了後にさらに2年間臨床研修を行うプログラムです。私が地方に出て分かったことは、医師やメディカルスタッフの少ない中で必要とされる力は、患者さんの生活や疾患をまんべんなく見ることができる能力でした。一つの分野に特化したNPももちろん必要とされております。しかし、人手の少ない地方での需要は、疾患をまんべんなく見

て、患者さんを支えることのできるNPでした。そのような視点からGIM-NPプログラムは誕生しています。「いつでも、どこでも、だれにでも」、この言葉に忠実であるよう、日々の研修でトレーニングを積み、2年後には機会があれば地域、へき地にてGIM-NPとしての即戦力となれることを目的としております。IQよりも、心の知能指数であるEQや社会的知能指数であるSQを重視し、どのような土地に行っても、人と仲良く、うまくやっていける人間性があること、ニーズがあればフットワークよく動き、その土地でその文化を尊重しながら自分のやるべきことができる、そんな優しさと柔らかさと強さを兼ねそろえたNPを育成していこうと考えております。現在は1期生が3名、2期生が5名、日々の研修に励んでいます。NPとしての医学的知識や技術だけでなく、人間力を鍛えていただき、仕事を通じて人としても成長できたら、どんなに素晴らしいことでしょうか。興味のあるNPがいたら私が経験させていただいた、素晴らしい地域やへき地での経験を、ぜひ次の若い世代のNPたちにも経験してもらえたらと考えています。

米国のNPは35万人となり、その歴史は約60年になりました。最初は数人が立ち上がり設立した制度です。当時の米国はベトナム戦争真っただ中であり、深刻な医師不足がありました。特に小児領域の医師が不足しており、そこにいた数名のNurseがNPの必要性を訴え、学び始めたことが始まりです。どんな困難があっても、続けることを決してやめなかった米国の先人たちの勇気や努力の連続を、私たち日本のNPも持ち備えて実践していけると信じております。日本の医療に貢献し、患者さんの役に立てる存在になる、その本質に対して決しておろそかなく、NPが当たり前の世の中になるよう前だけ見えます。